

児童生徒の学校適応への指導援助の 在り方に関する研究（第1年次）

— 一人一人のよさや違いを認め合う
学級の間人間関係づくり —

教育相談部

一 研究のねらい

現在の児童生徒（以下、生徒と記す）は、幼少期から人間関係が希薄になりがちであり、このことが学校不適応に陥る大きな要因の一つと考えられる。

学校適応への指導援助では、個すなわち個人への指導援助ばかりでなく、生徒の学校生活の基盤である学級にも目を向け「個と環境（特に学級の間人間関係）との調整」という視点からの指導援助も重要である。

そこで本研究では、学級内において好ましい人間関係を深めることを目指して、学校適応への指導援助の在り方について、実践を通して研究することにした。

二 研究の概要

1 指導援助の方針

学級において好ましい人間関係を深めるためには、生徒一人一人が学級内での対人関係の拡大・改善を図ることが必要である。このことは、自己理解や他者理解を一層深めることにより達成できると考えた。

そこで、学級の生徒全員を研究対象として、学級の間人間関係づくりに有効であるとされる構成的グループ・エンカウンターを中心とした指導援助を、小・中・高等学校それぞれ二学級で行うことにした。

2 生徒のとらえ方

アンケートと学級担任の日常の観察を基にして、生徒を《適応》《順応》《不適応》にグループ分けすることにした。表1は、それぞ

れの特徴を示したものである。

この中から、日ごろなかなか教師の目が届きにくいと言われる《順応》の生徒に焦点を当てて研究を進めることにした。

表1 各グループの特徴

適応	集団との調和を図り、個性や能力を生き生きと発揮できる状態を求め、自分を学級に合わせようとしたり、自分に合うように学級そのものに働きかけようとする。つまり個と環境の調整作用がうまくできている状態。
順応	一見すると学級と適応が図られているように見えるが、自己の明確な考えを持たずに学級に同調しているだけの状態。
不適応	個と環境の調整作用がうまくいかず、個人と学級の間で不調和が生じ、何らかの緊張や葛藤が生まれて、様々な問題行動が発生しやすい状態。

3 実践内容

(1) 指導援助の在り方を探るための調査研究
アンケートにより、生徒一人一人の学級生活の実態をとらえることにした。調査項目は、次のとおりである。

- ◎ 適応を探る項目（図1の①～⑤）
- ◎ 順応を探る項目（図1の⑥と⑦）
- ◎ 好ましい人間関係をみる項目（図1の⑧と⑨）

◎ 互いのよさや違いを認め合えるかをみる項目（図1の⑩と⑪）
次のものは、中学生・高校生用のアンケートの一部である。

- ⑧ あなたが、この学級の一員であることに誇りを感じていますか。
●とても・まあまあ・あまり・ぜんぜん